

2023年度 中京大学チャレンジ奨励金 最終報告書

2024年 2月 9日

学部・学年 総合政策学部 4年

氏名 目黒 優衣

1. プロジェクト名

教師としての力を高めるケンブリッジ大学教職スタディツアー

2. 活動期間

2023 年 2 月 17 日 ~ 2024 年 3 月 4 日

3. 主な活動場所

中京大学、ケンブリッジ大学ヒューズホール、ケンブリッジ大学教育学部

4. 参加者 4 名（「7.参加者名簿」に参加者氏名等を入力してください）

5. 予算・使用経費等（足りない場合は各自で列を足してください）

費目	品名・内容	予算金額	執行金額
例) 消耗品費	文房具、教科書、材料費	100,000 円	85,000 円
材料費	参考書購入費	30,000 円	8,978 円 ※購入冊数を減らしたため減額。
消耗品費	消毒液、消毒液を入れる容器、洗濯洗剤・柔軟剤	4,990 円	2068 円 ※印刷用紙やネームカードを持ち合わせて代用したため減額。
渡航費補助	燃油料・空港税	40,8800 円	476,400 円 ※メンバー変更に伴い、予約が遅れたため増額。減額した他項目からの流用で対応（現地・空港間交通費から 25,250

			円、現地ロンドン訪問交通費から27,350円、事前研修費から15,000円)。
宿泊費補助	宿泊費	256,000円	256,000円
交通費	現地・空港間交通費	40,000円	14,750円 ※グループチケット購入により、予定より安価に購入できたため減額。
交通費	現地ロンドン訪問交通費	44,000円	15,913円 ※グループチケット購入により、予定より安価で購入できたため減額。
交通費	現地研修交通費	—円	10,626円 ※研修のために教育学部及び小学校2校を訪問したため追加。現地研修会場費から10,626円流用。
講師謝金	謝金	40,000円	40,000円
旅行保険加入費	旅行保険加入費	24,000円	28,600円 ※保険料の値上がりのため増額。通信連絡費から4,600円流用。
通信連絡費	現地SIMカード	13,600円	7,920円 ※予定より安価な商品を見つけて購入したため減額。
施設使用費	現地研修会場費	72,000円	24,000円 ※ヒューズホールのセミナールームの使用回数が減ったため減額。
事前研修費	事前研修費	15,000円	0円 ※学内の資料室など無料で借りられる場所のみで実施できたため減額。
現地研修費	現地研修費	—円	20,577円 ※ウィルソン先生にご紹介いただいた、ケンブリッジ大学のキャンパスツアーに参加したため追加。現地研修会場費から20,577円流用。
合計		948,390円	905,832円

6. プロジェクトの活動報告

◆プロジェクトにおける活動内容と目標

<活動内容>

- ①日本での事前研修、②英国現地研修、③帰国後の事後研修

<目標>

ケンブリッジ大学のカレッジを舞台に、教職に関する探究活動を行うことによって、教職・教育学分野における中京大生の資質・能力を向上させ、未来の教育を担うリーダーを育成します。

[目標の達成を評価・判断する4つの観点]

- ①ケンブリッジ大学の先生から研究テーマの発表についてコメントをいただき、各自の研究テーマについての日本国内にとどまらない新しい視点を得ることができた
②イギリスと日本の背景の差異を踏まえて各自の研究テーマについて理解することができた
③事前研修と現地研修を通して、教職に対する関心や意欲が高まった
④現地研修を通して（日本の）教職の仕事を多面的・俯瞰的に捉えることができた

◆中間報告時に抱えていた課題への対応結果

<中間報告時に抱えていた課題>

中間報告時には特に課題を抱えていなかった。しかし、中間報告時以降に生じた課題として、活動に必要な時間が不足することが考えられた。

<対応結果>

活動時間が不足することが考えられたため、共通認識の課題や各自の課題について事前に論点を整理し、LINEやGoogleドライブによって情報の共有を行い意見の交換や議論への取り組みを速やかに行うことができた。

◆プロジェクトの目標達成状況（活動内容等を具体的に記入してください）

<達成状況>

自己評価による達成度：84%

・ダドレー先生による講話

ケンブリッジ大学にて、ダドレー先生にイギリスの教育現場が抱える課題について講義をしていただき、教育現場に何が必要であるかを議論してきました。また、それぞれが考えている研究テーマについて発表をし、日本国内にとどまらない視点で今後の探求のためにコメントをいただきました。

・ウィルソン先生による講話

ウィルソン先生の学生に現在研究しているテーマの発表をしていただき、今後の各自の研究の進め方について考察、議論を行った。ウィルソン先生からは教師の役割についてご指導いただき、日本国内だけでなくグローバルに教師が求められている資質、能力について議論を行い、日本の教員養成についての考察も行ってきた。

・ケンブリッジ大学キャンパスツアー

ウィルソン先生に紹介していただき、31のカレッジからなるケンブリッジ大学のキャンパスツアーに参加し、それぞれの歴史や伝統、特徴について説明を受けた。ツアーを通して日本とイギリスの教育機関の違いについて考え、研究内容の評価・改善に役立てることができた。

・小学校研修

ケンブリッジ市内にある小学校を2校見学させていただき、それぞれの特徴や背景について考察を行った。日本の小学校との差異を考え、今後の日本の小学校に必要な変化について学生間で意見交換、考察の修正などを行ってきました。

・ロンドン研修

ロンドンでは、教員として生徒の引率の際に注意すべき点や必要な声掛けなど、教師としての実践的な活動を目指して活動してきた。また、日本で取り上げられるイギリスの歴史や文化、日本の歴史や文化が海外の国々からどのようにみられているかを実際に体験することによって、さらに深い学びとなる授業にするために必要なことについて多面的に考察を行ってきた。

・教職フェスタでの活動報告

現地研修後には、教師に対する高まった関心や意欲を他の学生にもつなげていくために教職フェスタという活動を企画し、中京大学で教職課程を履修している学生や今後履修するか考えている1年生に対して、PPTで活動報告を行った。

◆改善点、やり残したこと

私たちがこの研修全体を通して改善すべきだと考えた点は、問いや考えを共有する時間についてです。活動後半はそれぞれの課題についての探求を行っていたことや講義による多忙によって共有する時間の確保が困難であった。個人による活動も重要ではあるが、共有することで発見することもあるため改善すべき点であると考えました。

研修でやり残したことは、11月に予定していたダドレー先生へのオンライン発表会を行い、意見をいただくことです。本来は最終報告の前に、私たちの学びや考えをダドレー先生へお伝えし、さらに深い学習に繋げる予定でしたが日程や課題探求・整理の都合上行うことができなかった。しかし、最終報告後にはなりますがダドレー先生の来日に合わせて3月4日に名古屋大学にて発表会を行い、意見をいただき振り返りや新たな問いの発見を行う予定です。

◆今回のプロジェクトを実施したことにより、どのような気づきを得たか

今回実施した研修全体を通して得られた気づきは、大きく四つあります。

第一に、参加した各学生の関心や将来に関する気づきです。大学院に進学し不登校をテーマに研究することを希望している学生は、ケンブリッジ大学のダドレー先生や現地研修で訪問した小学校の先生にイギリスの不登校に関する質問をし、不登校に関してイギリスと日本の共通点や相違点に気づきました。さらに、このような気づきを得られたことにより、研究を行うにあたり海外での議論や状況にも目を向けることの必要性を実感することができました。他方で、英語の教師を目指している学生は、現地研修において、ケンブリッジやロンドンに住む英語話者の発音や言い回し、標識の語用、そこから見える国民性を味わい、コミュニケーションツールとしてだけでなく、言語が持つ文化的側面に改めて気づくことができました。将来、このような伝わるものの凄みや怖さに気付かせる種をまける教師になるために専門分野を生かしたい、という学びのモチベーションになりました。

第二に、自分の目で本物を見ることの重要性です。チャレンジ奨励金の選考段階において、オンラインで実施することの可能性も問われました。しかし、実際に現地を訪れたことで、普段はケンブリッジ大学の学生が学んでいるカレッジの様子やケンブリッジの街の様子、小学校の様子やロンドンの街並み、そして、大英博物館に展示されている数々の歴史的価値の高い展示品に全身で触れ、五感で感じることができました。画面に映された一部だけでなく、本物をそれぞれの目線で観察することで、より一人一人に合った学びを得ることができ、全員で同じ目線から観察するよりも学びの幅が大きく広がったと感じています。例えば、私たちはそれぞれが研修中に撮影した写真を共有しており、他の学生が撮影した写真を見ることで、自分では

気付けなかったことにも気付くことができ、視野が広がりました。

また、自分の身体全体を使ってした経験は、教師になった際にも糧になると考えます。例えば、社会科教師の場合、地理の授業で自分が経験したイギリスの環境（気温、匂い、活気など）を自分の言葉で子どもに伝えたり、歴史の授業で大英博物館で見た教科書にも載っている展示品を自分が感じたことも交えて説明したりすしたりすることができます。実際に、将来の教材として使えるよう、大英博物館でパピルスを購入した学生もいます。他方で、英語教師の場合、イギリス英語でコミュニケーションをとった経験を子どもに伝えたり、アメリカ英語とイギリス英語の違いを体験を交えて説明したりすることができます。実際に、国際学部の学生たちはヒューズホールのエレベーターの表記とアナウンスがイギリス英語であること（1階がGround Floor（ボタンの表記は0）、2階がFirst Floor（ボタンの表記は1））や、駅のアナウンスがイギリスなまりであることを自身の目や耳で経験し、感激していました。

第三に、世界的視野を持つことの重要性です。上述の進学志望の学生が、ケンブリッジを訪れたことで自身のテーマに関する日本とイギリスの相違点及び共通点に気付いたように、海外の視点から見て初めて分かる日本のよさや課題、国を超えた共通点があります。このような気付きを得ることで、より探究が深まったり、新たな探究が始まったりします。ケンブリッジを訪れ海外から日本を眺める経験をしたことで、グローバルな視点を身に付けそれを活用していく力は、教師にも研究をする上でも重要な点だと感じました。

第四に、自ら学ぶための機会や環境を創り出すことの重要性です。私たちが行った研修は、事前研修、現地研修、事後研修から成り、事前研修ではプロジェクトの中心的な活動である現地研修の企画や調整から学生主体で行いました。将来、教職や教育学研究の分野を担うにあたり、必要だけれど大学からのサポートは受けられなかった「海外で教育（教員養成及び教育学研究）を学ぶ」という機会を、学生主体で創り出し実行できたことは、これからも学び続けていくうえで大変意義のある経験となりました。今回のプロジェクトを通して得られた、「機会が無いから諦めるのではなく、機会が無いなら自分たちで創り出せばよいのだ」という気付きは、これからの大学での学びや将来においても大切にしていきたい重要な気付きです。こうした、学ぶための機会や環境を自ら創り出すという姿勢は、自身の学びの幅、可能性の幅を広げることにも繋がるのだと学びました。

◆今後チャレンジしていきたいこと

（例えば、成果の活用・利用について、次回のプロジェクト活動に向けての抱負、卒業してからの展望等、自由に記入してください）

私たちが今回の研修で得られた成果を基に今後チャレンジしたいことは、大きく二種類に分けられます。

第一に、研修で得たことを自身のこれからの教育に関する学びや将来に活かすことです。

まず、来年度から大学院に進学し不登校の研究を行う学生は、研修で得られた学びや経験を今後の研究に活かしていきたいと考えています。現地研修では、ダドレー先生や訪問した小学校の先生からイギリスの不登校の現状やイギリスにおける不登校に対する考え方を教えていただいたり、ウィルソン先生とのディスカッションでどのような状況下でも共通する教育の普遍的な部分について考えたり、小学校を訪問した際にはイギリスの学校における教育やそこで学ぶ子どもたちの様子をその場で見たりしました。ここで得られた学びや気付きは、不登校に関しては大学院での研究の視野を広げるものに、教育の普遍的な部分に関しては不登校の背景を考えるヒントに、小学校訪問は実践レベルで不登校や子ども支援を考えるヒントになりました。したがって、現地研修で得られた学びや経験を今後の研究や教育実践に活かせるように整理・再構成し、実際に活かしていくことを今後のチャレンジとしたいと考えています。

他方で、英語教師を目指している学生は、研修で得られた学びや経験を将来の教育実践に活かしていきたいと考えています。実際に現地に赴いたからこそ深く味わうことができた、教育への考え方・取り組み方を含める異文化を、自分の教育観を磨く材料として探究し続け、日本の文化の良さも生かした取り入れ方を模索していきたいと思っています。したがって、この学生にとっては、研修で得られた学びや経験をこれから教職課程での学びを続けていく中で整理・再構成し、教師として活かせるようにすることが今後のチャレンジです。

第二に、来年度以降、私たちと同じようにケンブリッジ大学での研修を通して教育を学ぶ教職課程履修者が、教師としての力を高め教育学の知見を深めることで、教育分野のリーダーとしての意識を育成していくサポートを行うことです。既に来年度の活動に向けて、研修を通して教師としての力を高めたいという強い志を持った学生が活動を始めています。1期生として研修を行った私たちも、次の代の学びのサポートをしていきたいと考えています。私たちのチャレンジ奨励金のサポートを受けた活動は終了しますが、サポーターやアドバイザーの立場として今後も研修に携わることで、これからも「教師としての力を高める」学びや活動を続けていきたいと思います。具体的には、私たちが研修を通して学んだこと、気付いたこと、課題になったことなどを伝えることで、より充実した研修を実施できるようにサポートしたいと考えています。

このようなサポートは、来年度以降の参加者のより深い学びや教育分野の資質・能力の向上に繋がるだけでなく、1期生として参加した私たち自身の教師としての力を高める経験にもなります。つまり、①私たち自身のレベルアップ、②教育分野における高い資質・能力を有した学生の継続的な育成の二つの面からのチャレンジです。したがって、今後は研修に参加する後輩たちのサポートを通じて、研修で学んだことのアウトプットを重視したチャレンジをしていきたいと思っています。

◆実施結果（成果）

※必要に応じて写真・現物添付可。枠欄が足りなければ、追加してご記入ください。

<ダドレー先生の講話の様子>



イギリスの教育制度改革の変遷とそれぞれの特徴、学術の教育的影響などについて学びました。特色からは、現在の日本の英語教育にもリンクする部分（特色ある学校づくりや「どのように」学ぶかを重視する教育）が多くあり、日本の教育制度の変遷やその経緯などもしっかりと学びなおしたいというモチベーションにもなっています。学術の教育的影

響についての講義部分の中心的なトピックは、教師の self-esteem（自己肯定感・自尊心）が生徒に及ぼす影響であり、印象深いです。数的データを用いての考察をみんなでやり、自分が親・生徒・教師だったらと多角的な視点で理想な教育を考え、教育とはなにかや、捉え方・観察・振り返りの仕方の視野を広げることができました。

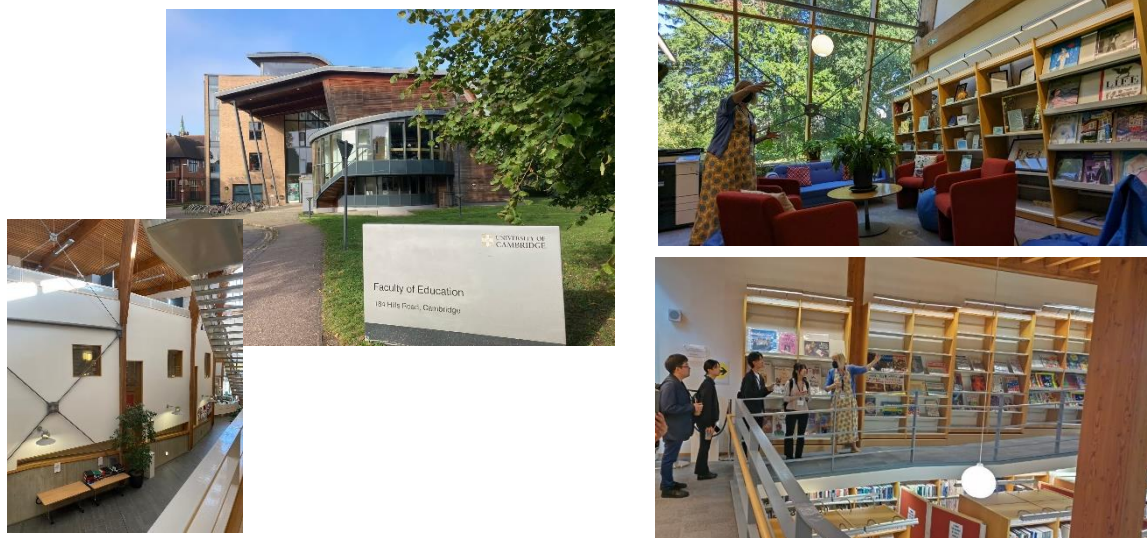
<ウィルソン先生を交えてのディスカッションの様子>



教育学部の化学実験室のような場所をお借りして活動しました。共有スペースの壁面には、実際に本物の元素も閉じ込めた周期表の様々な模型、「My Best Teacher」という生徒が尊敬する学者の記事の切り抜きや、著名人の名言を掲示して紹介するコーナーがあり、教師を目指す学生の個性豊かさが現れていて素敵だと感じました。中京大学には、教育学部がなく、教師を目指す人の専門分野も多様という、高め合うのに恵まれた環境にあるので、このような掲示板は私たちが実践しても、学年や教科に関係のなく高め合う関係構築のきっかけづくりになるのではないかと感じています。

講義については、ウィルソン先生を訪ねてイギリスを訪問していた研究者の方の学会用発表を急遽聞かせていただけることになり、それについて意見交換をする形で行われました。ITを取り入れる教育が学校の環境や状況に関係なく、無批判に新しいため良いとされることもある近年における、教授の在り方とはどんなものかというようなトピックでした。具体例として挙げがっていたダイアログ学習法（生徒の分かったつもりや教師の押し付けを防ぐために、教師の指示を生徒に説明してもらいながら進める学習法）に関して、教育哲学を学ぶ総合政策学部の学生は、その知識を生かしつつ、共感をし、学びを深めていました。

<ケンブリッジ大学教育学部見学訪問時の様子>



教育学部の図書館司書の方が、館内を案内してくださいました。研究者のデスクやセミナー教室がある建物に図書館が内設されている形でしたが、教室以外吹き抜けのようになっていたり、くつろげるようなスペースがあったりと、とても解放感のある環境に、入りやすさにおいて日本の図書館との違いを感じました。

また、図書館の棚には教育文献だけでなく、教具なども置かれていたことがとても新鮮で画期的だと感じました。日本では近年 STEAM 教育が注目されていますが、理数教科などへの抵抗を減らす方法として、効果的な教具で児童生徒の興味を引き、学ぶモチベーション変えることは一つの案だと考えました。そのための教材集めの環境がとして、より良い形があるという点で日本の教育（児童生徒により良い教育を施すための教師教育という面での）には課題点があると考察しました。



<ケンブリッジ市内 Primary school 2 校 見学訪問時の様子>



見学校：

Trumpington Meadows Primary School

Fawcett Primary School

施設自体の設計やその使い方、教師の寄り添う指導や深い問いの投げかけ（Why を使った問いかけ）などを直に観察できたことが有意義でした。

例えば、廊下の使い方について、日本であれば「廊下は走らない」と明示的に指導する場合も多いと思うが（それが悪いというわけではなく）、そうしなくて良い場所であることを環境を整えることで示しているという印象を持てる教育スタイルには、考えさせられました。



また、そのスタイルが、教室で学べない児童生徒の居場所にもなっている現場を見たり、また別の機会に、貧困家庭への配慮の意味も含む朝のおやつ文化があることを知ったり、special needs の児童生徒のためのインクルージョンルームを見学したことで、多様な特性やバックグラウンドを持つ児童生徒それぞれにとって良い環境とは何だろうと考えるきっかけになりました。

加えて、いろいろな教科の授業や教室を見学し、教科教育の視点でも教室の環境づくり（掲示物、机へのまとめ方など）が大切だということが分かりました。



<ロンドン見学訪問時の様子（歴史・文化・経済・政治的観点から）>



ケンブリッジ市内とは異なり少しに賑やかな雰囲気、旅行者らしき人も多いことや、交通手段が豊富であること、お土産品の値段の違いなどからも経済や文化の中心の街だと感じました。また、他には、大聖堂などを訪問し、ケンブリッジの伝統的な信仰や自由行動の際に訪問したイーリーでの生活に根付いたまま変容していくような信仰とも異なる、そのハイブリッドのような宗教観にも触れ、宗教とは何かや、日本や自分自身の宗教観についても考える機会になりました。



大英博物館の見学では、児童生徒の引率を想定して、時間配分などを気にしながら回りました。とても広く、展示される内容も幅広いため、完全に生徒の興味に合わせた自由行動にすることは難しいことは実感しました。そういった実感を持たせたことで、児童生徒の社会科見学先の下見をする際に重要な視点に近いものを得られたのではないかと考えています。



<ケンブリッジ市内散策での学びの様子>

現役のケンブリッジ大学院生によるガイド付きのキャンパスツアーに参加をしました。複数のカレッジそれぞれの歴史や学びの特徴、実際の学生からのコメントはもちろん、それに加えて、研究所や観光名所、有名な物理学者とゆかりのある飲食店の紹介などもしてくださいました。それらの内容ももちろん学びになったが、他のツアー参加者みんなが自分の興味に合わせた相互のコミュニケーションを図ろうとする姿や態度などから、異文化を感じ、自文化を相対的に見ることもできた点でとても有意義でした。



キャンパスツアー以外でも、滞在期間中の日常生活の行動を教育的に観察し、学びを深めることができました。例えば、寮の近くにあった公園で、週末限定の移動型遊園地が来ていたことやショッピングモールの真ん中に、日本とは異なる規模の遊び場があり、その周りには必ず保護者が少しくつろげるようなスペースが設けられていたことを、日常の中に非日常を演出することで子どもも保護者も満足のいく、負担の少ない子育てになるのではという考えの下、市が行っているものなのではなどと考えメンバーと話し合うことができました。

<教職フェスタの様子>



教職課程履修者や履修を考えている学生向けに開催された教職フェスタにて、研修での成果を、メンバーがまとめたパワーポイントを使い、プレゼンテーションで紹介しました。

<事前事後研修の様子>



月に1～2回、それぞれの研究テーマについて話し合ったり、研修の計画や振り返りをしたりする目的で行っていました。

7. 参加者名簿（足りない場合は各自で列を足してください）

番号	学籍番号	学年	氏名	備考
1		4	目黒 優衣	
2		3	児玉 美緒	
3		3	谷口 達俊	
4		2	富澤 奏	【メンバー変更】 ※エントリー時より変更
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				